

和4年度山梨県南都留地域教育フォーラム提案書

富士吉田市立教育研修所
所長 村松 悟

地域とともにある学校

～「活力創造都市 富士吉田」を創り出す児童生徒の資質・能力の育成～

1. はじめに

富士吉田市立教育研修所

昭和26年富士吉田市内教職員の研究活動に対する市の女性を陳情、その結果、市内教職員の研修センターとして、市立教育研修所の設置が決まる。

本研修所では、その時代時代に生ずる教育課題に対応するために、教職員の資質・向上のための研修を実施してきた。一方で、富士吉田市の特色としてある富士山学習を市内小中学校に深く根付かせ、児童生徒の健やかな成長につなげていくための事業を実施している。本提案の副題である『「活力創造都市 富士吉田」を創り出す児童生徒の資質・能力の育成』は、まさに研修所が担う役割を表したものであり、これを指標とした事業を紹介する中で、本研修所の連携活動をひもといてみる。

2. 本研修所事業の紹介

ふるさと発見ワークショップ

背景

一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して資質・能力の育成を図るキャリア教育の推進が求められている。具体的には、多くの大人とふれあうことにより多様な生き方や価値観に触れ、経験し、感じる。今の学びが社会とつながっていくと知ること。自ら生きる力を発見していく道しるべとなるものである。

そのため学校では、職業講話学習の機会を効果的に教育課程に組み込んでいきたいと考えている。しかし、現実的には、企業とのつながりが希薄かつ時間的な余裕がなく単発的に1人の講師を招請するような形が一般的である。

一方、市行政においても、将来吉田に帰り、吉田を支える人材を育成したいという思いが強くある。

願い

子供たちに

吉田の魅力を再発見させたい

働くことについて考えさせたい

大人になって、いつか吉田に帰ってきてもらいたい

○目的

今年で4年目となる富士吉田市内中学校3年生を対象とした「ふるさと発見ワークショップ」は、「進路決定前の中学校3年生が、地元の仕事や地元に関わる仕事で活躍している若者から話を聞くことで、富士吉田市と関わりながら働く選択肢について学び、生徒のキャリア発達を図る。」ことを目的として開催してきた。

○連携による準備・運営

ワークショップの開催においてもっとも大きな障壁となるのが、講師を集めることである。教育研修所だけでは限界があるため、庁内部署で連携し企業の選定から講師の依頼をするとともに、富士吉田市地域おこし協力隊の地域教育コーディネーター「かえる舎」とも連携し、準備から当日の運営を行っている。組織・役割分担は、次の通りである。

- ・富士吉田市役所 商工振興課：企業への依頼 等
地域振興・移住定住課：かえる舎との連携 等
- ・特定非営利活動法人かえる舎：講師との連絡調整、ワークショップ運営・
- ・富士吉田市立教育研修所：学校との連絡調整、生徒のグループ分け、質問集計



○ワークショップの講師について

◆選定・依頼に際しては、次の2点を中心に据え、各企業への相談および依頼を行っている。

- ・生徒が講師からのメッセージを自分事として捉えることができるように、中学3年生の年齢に近い講師を依頼
- ・富士吉田出身だけでなく、仕事を通じて富士吉田に関わりがある講師を依頼

◆協力していただく講師の職種はできるだけ重ならないように、多様な職種を依頼している。

- ・職種：製造・放送・介護・飲食・ホテル・美容師・IT・織物・銀行・保育士・消防士・保健師・公務員

◆ワークショップのコース数は、中学校の生徒数に応じて開設口座の数を変えている。

- ・18名の講師を依頼し、富台中3講座・明見中5講座・下中10講座・吉中10講座を開設。1人の講師が1～2校を担当する。

○ワークショップの流れは、次の通りとなっている。

生徒は、自分が希望した3つのコースを聞くこととする。体育館の中に講師の数だけのブースを設置し、生徒が移動しながら講師からの話を聞く。

A かえる舎によるオリエンテーション：働くこと・収入・職種

B 講師の話 20分間*3回

- ・自己紹介：中学の時の自分、富士吉田ってどんなところ？
あこがれの人、休日の私

- ・私の3大ニュース
- ・私にとって、仕事とは・・・？
- ・生徒へのメッセージ
(生徒からの質問)

C まとめ

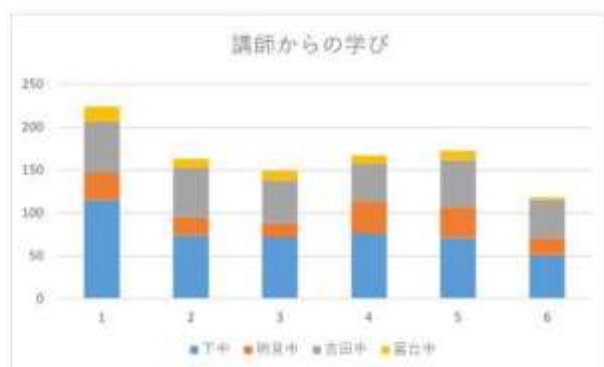


○ワークショップ事後アンケート結果

講師からどのようなことを学んだか

	1	2	3	4	5	6
下中	115	74	72	76	71	51
明見中	32	21	16	38	36	20
吉田中	60	58	50	44	55	44
富台中	17	10	11	9	10	3

1 働くことの楽しさ
2 働くことの意義
3 仕事内容
4 富士吉田市のよさ
5 努力することの素晴らしさ
6 仕事の大変さ



かる。

ワークショップ後に行ったアンケートの結果では、1から6の項目について当てはまるものをすべて選ぶようにした結果である。1「働くことの楽しさ」の項目が最も人数が多く、反対に「仕事の大変さ」は最も少なくなっている。講師のみなさんが、働くことのどこに重点を置いたかということが分かる。仕事の内容については、時間的な配分で伝えることができなかったが、職種にとらわれずに、働くことの意義や努力することの素晴らしさを学ぶことができたという回答している生徒が多い。

また、ワークショップのもう一つの目的である「富士吉田の再発見」という点では、富士吉田出身以外の方もいる中で、富士吉田のよさを感じ、よさを発見することができた生徒が多くいることが分

以上のように、「ふるさと発見ワークショップ」は、中学3年生一人一人が働くことについて考え、郷土愛を育む貴重な取り組みとなっているが、その始まりは、10数年前に始まった富士吉田市教育委員会と富士・東部教育事務所との連携による「富士吉田地区小中高連携連絡会議」に端を発している。

3. 連携の始まり 富士吉田地区小中高連携連絡会議

背景

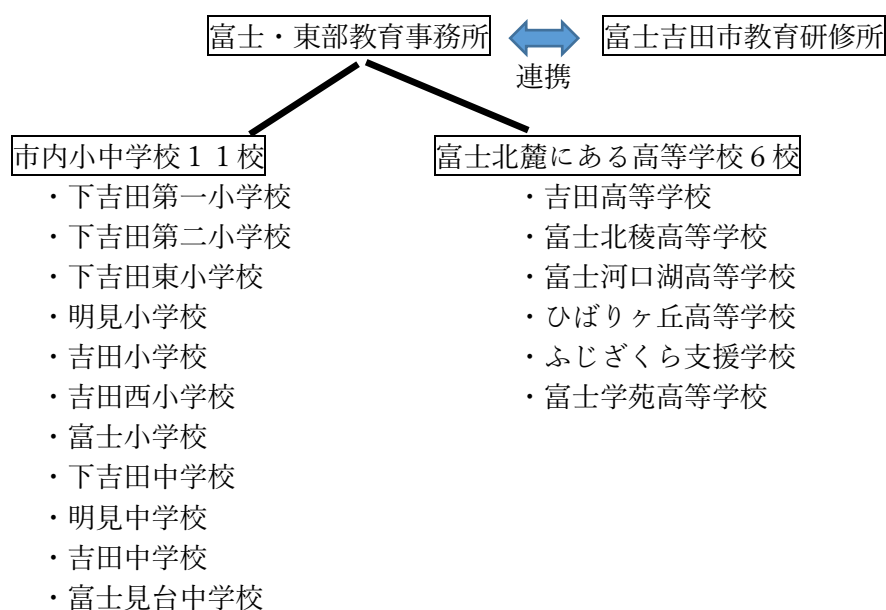
「小一プロブレム」「中一ギャップ」などが社会問題となっている。一方、高等学校へ進学する子どもたちの多くは、環境や社会情勢の急激な変化について行けず、心身の不安定さが顕在化される。また、生徒指導の困難な状況の肥大化とともに、不登校や心身に障害を持つ子どもたちも増大している。

上記のような児童生徒を取り巻く社会状況等を鑑み、「富士吉田市の子どもたちの健全な育成を目指す」ために、富士吉田市教育委員会から富士・東部教育事務所に要請し、富士吉田地区小中高連携連絡会議が平成20年に発足される。

富士・東部教育事務所の地域教育支援スタッフが担当する地域の連携活動の内容が一致することから、全面的に支援を受ける

21年に行われた連携会議において、「養護教諭の連携」「授業・部活での連携」の内容に絞って連携を進めていくことが確認される。

組織



具体的な連携活動の内容については、次の通りである。

○養護教諭の連携について

・「不適応等の児童・生徒の現状と対応について」をテーマとして、児童・生徒への対応等についての情報交換を行う。

H2 2～2 3 「発達障がい」と思われる児童生徒への対応

H2 4～2 5 「不登校」の児童生徒に関わる対応

- ① 考えられる原因
- ② 養護教諭としてできること
- ③ 家庭環境の把握と対応

H2 6～2 7 「心因性疾患」について

○授業、部活等での連携について

- ・授業参観や公開授業、研究授業等に参加し合い、教科の専門的立場での小中高のつながり、系統性、児童生徒の様子から学びあう
- ・中学校と高等学校の部活感で連絡を取り合えるような体制作り

成果・課題

○取組により、それぞれの学校種間の発達段階に応じた実践や課題、学校種間の特色あるスキル等が共有され、義務教育から中等教育までの指導・支援の系統性を見通した連携体制を構築できてきている。

○一方で、進学時の不適応の解決だけでなく、いじめ、不登校・引きこもり、多様化する特別支援教育、子供の貧困問題等への対応や学力向上への取組等の喫緊の教育課題に関しての連携について、本連絡会議で十分に論議されていない。



小中高連携連絡会議が富士吉田市教育委員会に移管

富士・東部教育事務所が受け持ってきた小中高連携連絡会議は、平成27年度の活動で一つの区切りを迎えることとなり、次の理由により、富士吉田市教育委員会に移管することとなる。

- ・本連携連絡会議は、富士吉田市の子どもの健全な育成に資する連携教育活動であり、富士吉田市教育委員会に事務局を有することでねらいが一層明確となる。
- ・富士吉田市教育委員会は、幼保小連携連絡会議等のいくつかの連携活動を事業として有しており、連携活動の実績や運営のノウハウを持ち備えている。
- ・富士吉田市教育委員会が事務局を務めることで、これまで以上に地域に密着した内容を扱いやすくなる。
- ・移管を機にこれまでの小中高連携連絡会議の成果や快打を参考に、活動を見直して発展的に取り扱うことができる。

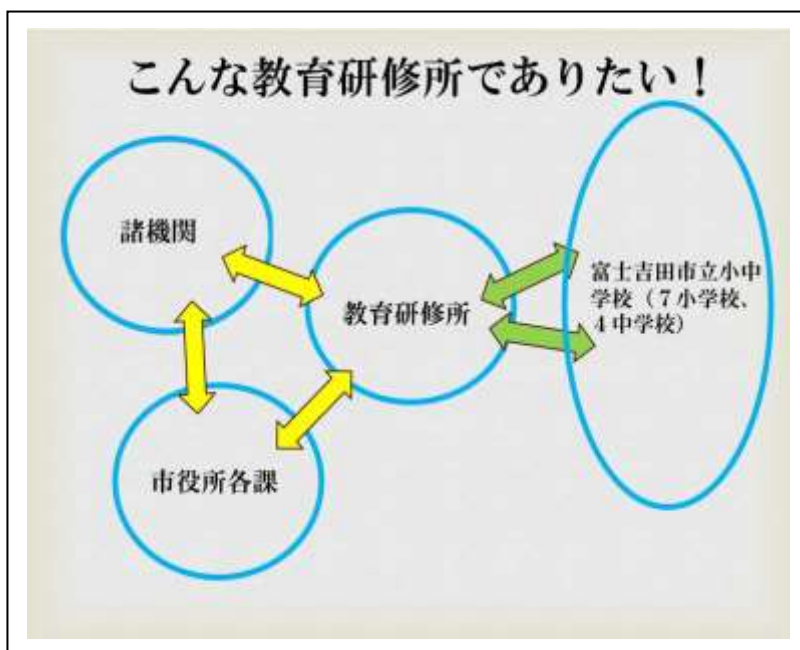


4. 連携の広がり

富士吉田市立教育研修所 小中高連携連絡会議

目的を発展的変更

小中高の学校種間の連携の目的を「進学時の不適應或不登校等の学校不適應を解決する」ことを含めた「喫緊の教育課題に関する連携」と、「**活力ある地域社会を創造する子供たちの育成**」とする。



背景

○新学習指導要領においては、複雑で予測困難な社会の変化の中で、子供たちに育むべき未来社会を切り拓く資質・能力を社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」の実現が示された。また、中教審答申を踏まえて文部科学大臣が示した「次世代の学校・地域」創世プランでは、学校と地域が一体となった「地域とともにある学校」への転換を推進し、学校を核として地域創生を図る方向が明確にされた。

○富士吉田市においては、平成30年度から平成39年度の10年間における本市のまちづくりの基本的な指針である「第6次富士吉田市総合計画」が策定され、「活力創造都市 富士吉田」、「魅力ある富士北麓地域」を創り出す主体となる次の時代を担う世代の健全な育成が示されている。

教育課題部会を設置

- ・「活力創造都市 富士吉田」、「魅力ある富士北麓地域」を創り出す主体となる児童・生徒に必要な資質・能力について、本連絡会議で議論をすすめ、その上で地域社会との共有化を図る必要がある。
- ・地域創生の視点から、行政（富士吉田市）と地元企業との連携が不可欠である。



連携活動の柱

「『活力創造都市 富士吉田』を創り出す児童生徒の資質・能力の育成」

実践内容

H30

- 第1回 ・富士吉田市と県立富士北陵高等学校との包括的連携について
・今後の行政のあり方（行政代表）

- 第2回 「地元企業の求める人材について」
加藤電器製作所 代表取締役会長 加藤 正芳 氏

R1

- 第1回 ・今後の富士吉田市のあり方（行政代表）
・富士吉田商工会議所の働きかけについて（商工会議所）



- 「ふるさと発見ワークショップ」企画
- 職場体験学習協力企業リストアップ

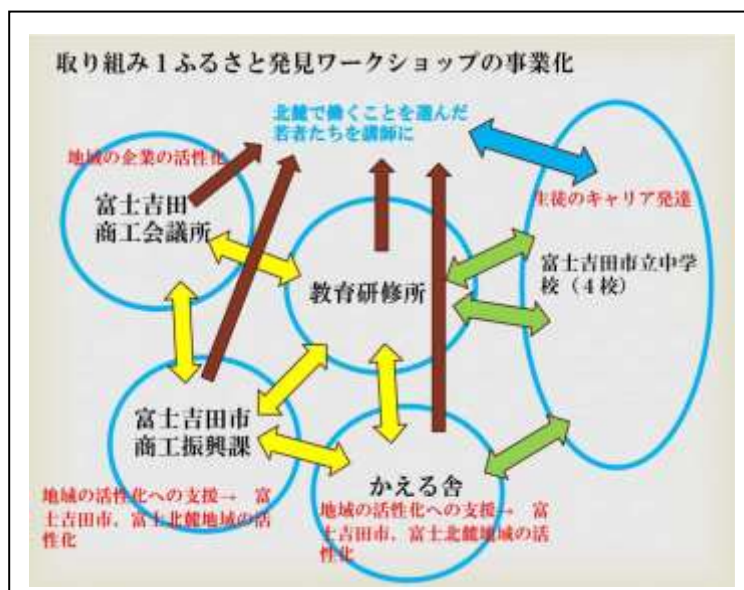
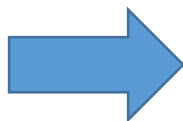
第2回

- 「ふるさと発見ワークショップ」視察
開催場所：吉田中学校3年生
講座：10講座

R2

- 「ふるさと発見ワークショップ」視察
市内4中学校の3年生を対象に実施

研修所事業化



職場体験学習について

- 教育的意義
- ・望ましい勤労観、職業観の育成
 - ・学ぶこと、働くことの意義の理解、及びその関連性の把握
 - ・啓発的経験と進路意識の伸長
 - ・職業生活、社会生活に必要な知識、技術・技能の習得への理解や関心
 - ・社会の構成員としてともに生きる心を養い、社会奉仕の精神の涵養 等

富士見台中学校以外の3校で行われる職場体験学習

- 従来
- ・実施時間：夏期休業中
 - ・実施場所：保護者の職場（都合がつかない場合は、知人の保護者の職場）
 - ・実施期間：保護者が事業主と相談し決める

※富士見台中学校では、1学期の終わりに学校で受け入れ事業者を探し2日間実施

R1 教育課題部会において

商工会議所青年部から提案

- ・生徒の職業観を育むために商工会議所として協力
- ・職場体験学習の受入事業所のリスト作成の協力

研修所から学校へ

- ・職場体験実施にかかる学校の負担軽減のための協力
- ・職場体験を実施する保護者の事業所に研修所の受入可能リストアップのお願い



製造・商品製作・織物・医療・飲食・金融 他
およそ50事業所の受入リスト完成

※新型コロナウイルス感染症によりR2・R3は職場体験学習中止
R4夏期休業中の7月21日～8月12日において、職場体験学習を実施



事業者からの声

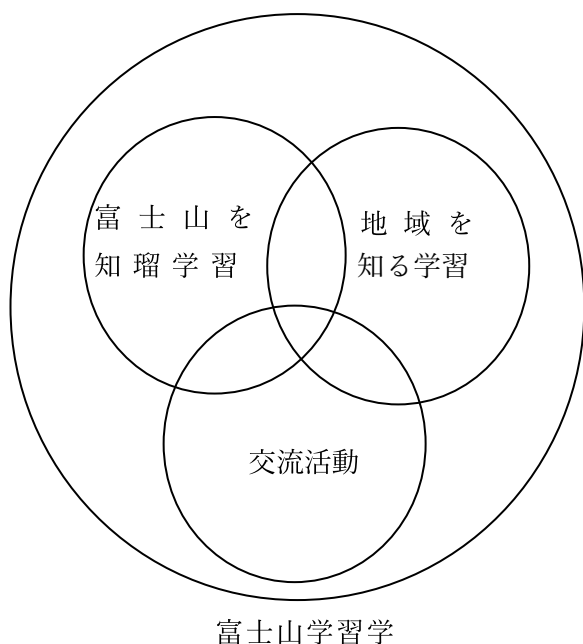
- ・若年層からのキャリア教育に取り組むことは、進路決定をスムーズにすることのみならず、勉強することの意義を明確にすることにも繋がると思い、大変有効だと思っています。
- ・職業選択の一助となったことに加え、地元の企業である当社を知ってもらう機会となったことは良かったと思います。



5. 学校と地域をつなぐ 富士山学習とキャリア教育

◆富士山学習の目的

富士山について学年を追って体系的に学び、また子どもたちの生活するそれぞれの地域の自然、歴史、文化等について学ぶことを学校教育の中に位置づける。また、富士山と地域の学習及び交流活動の総合的な学習活動を富士山学習と位置づけ、富士山と自分の地域に誇りを持てる子どもたちを育てていく



○富士山を知る

富士の裾野に生活しても富士山についてよく知らない子どもたちに富士山について体系的に学ぶ機会を与えたい。

○地域を知る

毎日生活している自分たちの地域のことを知り、そこからさらに多くのことを学ばせたい。

○交流活動

地域に根ざした交流活動をとおし、心を大きく成長させたい。

キャリア教育を位置づける

☆中学2年：職場体験学習

☆中学3年：ふるさと発見ワークショップ

富士吉田市の文化・芸術・教育の根幹をなす富士山教育を推し進め、地域を愛し、地域を作る児童・生徒の育成をめざし、様々な機関・団体との連携を深める

6. 終わりに

富士吉田市立教育研修所は、教職員の研修を主たる目的としている。一方で社会の情勢、情報化社会の進展、持続可能な社会、子どもの貧困など、日々刻々と変化している。新型コロナウイルスによる社会的な混乱は、まさしく予測不可能な未来の一事象であり、子どもたちが自ら考え生きる道を切り開いていく資質能力を育成していくことが求められている。

子どもたちを中心として、学校が必要とする支援や困り感・地域が子どもたちに寄せる期待や援助、教育研修所は、学校現場に近い行政機関として、学校を支え、地域と学校をつないでいくことを、時代の要請に応じた役割と捉え、事業を展開していきたいと考える。